京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十八卷 第一・二號

高田博士還曆記念論文集

昭和十九年二月發行

經濟論叢
第五十八卷 第一・二號（通卷第參百四拾參・參百四拾四號）昭和十九年二月發行

地人的開化

――經濟の哲學的認識――

作田莊一

一 哲學的に見る必要

經濟の科學的認識が極めて豐富に著はされ居るに比べて、經濟の哲學的認識となれば極めて稀少の言說あるに止まる。それも概して哲學者の側から提供され、哲學者は經濟に就いて科學者の所說に傾聽するから、寡聞なる自分としては未だ是ぞと思ふ卓說に接しない。今經濟の哲學的認識に關し聊か卑見を述べて見たい。この際に經濟の科學的認識以外に何故にその哲學的認識を必要とするかの疑問が科學者の側から提出せられるであらうが、これに對しては唯だ近世を超えた現代の思潮基調がそれを求めると答へたい。

經濟研究の優れて旺んであつた所は近世ヨーロッパである。そこでは中世の異種族的宗教の精神的重壓に反抗して同種族文化の復興より出發したる近世が始まり、近世は中世の神學的統一を破つて遠心分化の行程を執つた。

この行程に於いて哲學と科學とが別かたれ、科學は分科の學として文化史上未曾有の發展を遂げた。經濟科學も近世社會經濟の著大なる發展に伴ふて新科學としての盛運を謳はれた。然るに分化過程は止まる處なく行けば崩潰の外なく、これを濟ふものは統合過程である。自然科學は統合を怠がないが、人文科學は分化が過ぎるときに人生の一體性を見失ふが故に、人生研究に於ける分派追跡の後には當然に本源歸向の要請が起つて來る。經濟學の場合には分析的研究愈々旺んにして實人生を去ること益々遠くなつた。果ては例へば生産とは何ぞやの問に答へて、それは貨幣的價値を作り出す行爲なりと言ふやうな、商人界にしか通用しない見解に墮した。從つて統一的本源を見ない科學は進めば進むほど架空のものと化する。これを救ふものは科學の自立進行を承認しながら、これを統制する所の哲學でなければならぬ。科學と哲學とは相須つてその存立の意義を有し、共に現實に對するとしても、哲學の抽象的・論理的推究が無内容の空論となると共に、人生の本源への歸向を忘れてひたすらに分析に走る人文科學も亦異つた形の空論に終る。自立する經濟科學も哲學の一部たる經濟哲學も孰れも獨善の態度を避け、互に一は他に學ばなければならぬ。

經濟科學が統一的人生觀の指導を離れて獨善に陷るとき、それが眞實の認識より遠ざかることを語るものが經濟學に對する世間の輕侮である。それには低級な道を執つた近世經濟そのものに輕侮される事由もあるが、その輕侮を防がず却つて貴からぬ經濟に盲目的に追隨した經濟學の態度が二層輕侮を招く所以となつた。經濟學の最も榮えたイギリスに於いてさへ、この科學が謂ゆる人道主義者から輕侮されたことは周知の通りである。經濟學を修めた一人である自分の如きもこれまで幾度か其の經驗を有し、曾ては經濟學に對し餘りにも無理解な輕侮の言を與へた先輩に對し抗論を敢えしたこともあつた。これまで綜合大學に於いても他の諸學部から重んぜられな

いものは唯だ經濟學部のみである。然らば何故に經濟學は輕侮されるか。それは曾て輕侮された町人生活を研究するからであらうか。それならば寧ろ世間が憎惡する犯罪に就いて研究する犯罪學や刑法學が一層輕蔑される筈である。それは經濟學者の大半が一種の自然科學的研究に沒頭するからであらうか。それならば物理學や生物學などは更に輕侮される筈である。思ふに經濟學が輕んぜられるは、この學問自體の性格からではなく、寧ろ多くの學者が誤つた下品な方途に研究の歩を進めた所にあると考へられる。江戸期の經濟論は決して輕侮されなかつた。西洋から移入された近世經濟學は、人間性の中でも最も輕んぜられる個人利己心の發動に重點を置き、且つ人々の利己心の競合する所に成立する社會自然現象の法則を探究する。それは可しとして、大半の經濟學說は、犯罪學が犯罪を、病理學が疾病を排斥すると反對に、個人の利己心や社會の自然法則を許容し甚しきはこれらを辯護した。是處に經濟學の輕侮される事由がある。世人は經濟學を好ましからぬ學問と見て、遂には經濟學を研究する者をまで輕侮して來た。江戸期の經濟學は士大夫の學問であつた。これが本筋である。明治以後に西洋の經濟學を修めたる我々は、如何に世間から輕侮され居るかを知つてこゝから反省の途を開かなければならぬ。その反省は經濟そのものゝ人生にとつて重く且つ貴き所以に思ひ到らしめる。それには時勢に流されて經濟の闇黑面のみを見てゐた科學的研究に止らず、進んでその光明面を指示する研究に入らなければならぬ。そこでは人生に於ける經濟の位置を全面的・統一的に擧揚しなければならぬ。こゝに經濟の哲學的認識を求める必要が存する。

二　科學的より哲學的へ

科學も哲學も智識の性格としては等しく法則を求める理論であるが、その中でも科學は分派的法則を求め哲學

は本源的法則を求める。科學は一定の研究前提より出發し前提の吟味は哲學に委ねるが、分科の認識範圍に於いては一定の領域を持ち謂はゞ自治權を有するから、一の科學は他の科學と連絡をとるとも他に服從することはない。然るに哲學は一切の對境に面して本源的認識を求めるから、流派が分かれる以外には哲學は謂はゞ一つの統治權の存する如く唯一つあるのみ。その哲學は總論と各論とに分かたれ、各論の一として經濟哲學・宗教哲學の如きが存立する。故に經濟哲學と言ふも專門の一學科ではなく、經濟面を見る一章として哲學體系に加はるに止まる。各論の各章は必ず關聯し各論は總論と合體するから、經濟の哲學的認識は哲學が見渡す全野に於いて經濟の分野の光景を描くに外ならない。

然らば分派的なる科學的認識と本源的なる哲學的認識とに於ける分派と本源とは何に就いて見別けるのであるか。一の本家と多くの分家とを包む全一族は何であるか。それは卽ち「人生世界」に外ならないで、これを越へた存在は考へられない。人生世界を狹く解すれば、これと並ぶ「宇宙世界」が考へられる。宇宙世界は天文學的な宇宙論の如く一應對境を見る主體を離れ我を忘れて客觀的に見る世界であり、その中には生物的人類までに及ぶ地物自然界が總て包容される。これと並ぶ人生世界は人の立場から人生を主限として主觀的兼客觀的に見られる世界である。而して我等の認識の目途は結局は人生に歸着するから、宇宙世界は廣い意味の人生世界に包攝せられる。廣く見れば「人の生きる世の運び」こそ一切の認識の向ふ全野となる。此の「人生世運」に面して唯一の中軸に視線を向けるときに唯一の本源的認識たる哲學が成立し、周邊の多くの各部に視線を向けるときに多くの分派的認識たる科學が成立する。從つて哲學は要するに人生世運の中軸に着限せる「人生世界觀」又は「人生世運觀」であり、當然に形象界から形而上界に入る。この理論でなければ哲學とはならない。尤も一時は舊い形而上學を否定

し認識の根源を探るを以て哲學の職分となす風潮があつたが、これは主知主義の偏見であり、認識の根源と實在の根源とが結局は同一線に立つ所にまで到達して實在を見渡すものが本源的認識に外ならない。今や形而上學は更新されて來た。

經濟の科學的認識は人生世運の周邊的一分派たる經濟生活を限定してこれに視線を向けるものであるが、經濟の哲學的認識は人生世運の中軸に視線を向けてそこにて得られたる人生世運觀を基本となし、こゝから人生の一面たる經濟生活を見渡しその核心を見通ほすものである。外面を見たる科學的認識より進み入りて經濟生活の內面に含まれる人生觀的意義を明かにするものがその哲學的認識である。我々は謂ゆる方法論的に見たる科學的と哲學的との差別論には與みしない。否寧ろ哲學の實質たる人生世運觀に立つて一定の事象を見るや否やを以て科學的と哲學的との相違と見る。勿論その場合には謂ゆる方法の相違もあるが、それは唯だ方法である。人生世運觀に立つて經濟生活の意義を舉揚するとき、始めて經濟生活が他の生活面と關聯し人生世運の本源に繫がる系譜が明かにせられる。この階段に立つて見るときに、始めて經濟及び經濟學が輕侮されても已むを得ないか、或は大に敬重せられるべきかの判斷が與へられるのである。

然らば經濟の科學的認識から哲學的認識に進み入る徑路は何處にあるか。この場合に科學的認識を一つの概念に集約して何が經濟的なるかを擧げて見ても、それは哲學的認識に入る入場切符とはならない。蓋しそれらの認識の地盤が始めから一定の生活面に限られてゐるからである。また哲學的認識に入る爲には、單に科學的認識を深く掘り下げると言ふだけでも足らない。それには見事に地下水に掘り當て得る地上點に立つて居ることが前提であり、例へば經濟の自然科學的認識の如きは已にかゝる有望な地上點に立つてゐない。經濟の科學的認識から

哲學的認識に上ぼる途は、その科學的認識の中に含まれる全人生的斷層と人生世運觀の中に含まれる經濟生活の精髓とを連ねる一線に立つにある。

人間生活は歷史生活であるから、如何なる人生問題も總てこれを歷史的・發達的に見なければならぬ。經濟の科學的理論も單に一時代の經濟現象を說明し得るに止まる存立理論に滿足せず、その由つて來る所を明かにする發達理論に到らなければならぬ。またその理論は科學的なる以上は獨自の領域を有し「自體性」を持つ認識體系であるが、それは特殊のものに止まらず、そこには人生全般に亙る普遍の生活道が流れてゐることは疑ない。我々は斯く見たる經濟の科學的認識に就いて、歷史的發達の流の中に於いて經濟生活が具へる所の人生普遍の道を尋ねる。而してこれを尋ねるには前以て人生普遍の道を心得てゐなければならぬ。蓋し當途もなく唯だ經濟生活の中を探がし廻るのみにては徒勞に終るからである、斯くて人生の歸趣と經濟の主眼とを思ひ兼ねる所に科學的認識から哲學的認識への途が開けるのである。

三　人生に於ける經濟の位置

「人の生きる世の運び」に就ては、人間の生き行く道程と世界の運び行く道程とを一統一貫して見なければならぬ。我々は彼の人生觀と世界觀とを別々に見るものに做はず、一つの人生世界觀として見る。人は生きる當體であり、世は人の生きる境涯であり、一を離れて他は考へられない。人生世界は形象的には此世のみであるが、形而上的に見れば此世の奥に何かの形相に於ける彼世が實在し、少くとも實在すると念はれ、而して此世と彼世との關係を見る所に世界觀の本領が存する。人生世界觀は東西に亙り古今に通じて、渾沌世界觀・別離世界觀・相

卽世界觀及び開顯世界觀の順序を以て發達してゐる。第一段では二つの世界を未分のまゝに一所に見てゐる。それから第二段に二つの世界を別ち離して一の世界から他の世界に移ると見る。これが二元觀となつて不安を感ずるとき第三段に轉じ、二つの世界を相卽一如と見る。然るに一如の世界では人生が無爲に止まるに堪えずして第四段に到達し、一の世界から他の世界が開顯すると見る。茲に到達して始めて人々は心安らかに且つをゝしく生き働くことが出來る。我國に傳はるものは、靈きざる中實を包藏する奥の世界が窺りなく面の世界に開らけ顯はれると見る開顯世界觀である。この世界觀のみが克く歷史生活たる人生の問題を解く本源となる。經濟生活はこの地上に於ける生活であるから、必しも世界觀をまで持ち出すに及ばないやうであるが、それにても開顯世界觀に立つとき始めてこの生活の眞意義を尋ね得る。渾沌世界觀では尙ほ人生の分化を語り得ない。別離世界觀では地上の經濟生活は最も虐待される。相卽世界觀では經濟を含めて地上生活は何の確定せる方途をも立て得ない。開顯世界觀のみが高天世界から大地世界が開らけ顯はれるとなし、その大地世界に人の經濟生活が現はれると見る。從つて經濟の哲學的認識に入らしめ得る人生世界觀は唯だ開顯世界觀のみであり、此の世界觀を傳へる我國ほど古から經濟生活を敬重せる所は他にない。

高天世界から大地世界が開らけ、是處に人が生れるによつて本格的に地上の開化が始まる。「ひと」は二人相對する「人」たる以前に靈の留まるものとしての「靈留」である。ヨーロッパ語法に倣つて「ひとは言ふ」など輕薄な表現を試みてはならぬ。形而上的思想たる靈留を形象的に言へば、「ひと」は自覺し意識し志向し自ら起つて働く當體である。その「ひと」が「人」となり人間となり、人間生活が進展するとき、人生が開化すると同時に大地世界が開化するのである。「開化」の語は極めて廣汎な內容と重要な意義とを持つ。これを文明開化と騷いだ西洋崇拜思

想などと早合點して難癖を付けないやうに前以て斷つて置く。「開らけ化る」と言ふ言葉は太古から傳つてゐる極めて有難い言葉であり、大にしては大地世界が高天世界から開らけ化ることから、小にしては各人が幼孩の心から大人の心に開らけ化ることであり、その間に幾階段の開らけ化るものがあり、更に人間以下の萬物も開らけ化るのである。國語で「なる」と言へば、生る・成る・就る・化るなど幾多の意味があるが、それらは皆開らけて化るに始終する。我々の生活に於いて最も根源的であり且つ最も爆發的に悅ばしく感ずる場合は何かゞ「開らけた」ときであり、また最も内容的であり且つ完了的である悅びを感ずる場合は何かに「化つた」ときである。それを我等は簡約して「開化」と呼ぶ。ヨーロッパ語の Culture も我が開化と共通する點あるも、必しもこれに拘はる要はない。「開化」の一語こそ、人生のあらゆる志向と成果とを總括して世間的・歴史的生活を表示するに最も適當せる言葉である。開化は萬有に見られるが、開化の樞軸となるものは人間である。開化は主として「人生開化」である。

人生開化の當體は勿論人間であるが、その人間は歴史に於いては必ず「國」を成せる人々である。國の本質はもと全體性のものであるから、人生開化は具體的には「邦國開化」である。近世後期には總ての國々を連らねる世界生活が出現したから、この生活面には一々の邦國開化を以てしては蔽ひ盡くされない世界開化が現はれ始めた。されどこの世界生活は諸邦國生活の合流より成立せるものであり、世界生活そのものには未だ獨自の意識的開化なく、人生開化の本流は依然として邦國生活に在る。世界は動くとしてもそれは世界社會に發生したる集中力點たる自然性の勢力が動くのであつて、邦國と同樣なる生活の當體ではない。尙ほ世界は邦國生活の場であり、强大なる意識性の國家が世界の集中力點に近づきこの力點の動く方向に沿ふて動くときは、かゝる國家が世界的國家であり、その國家は或程度まで世界の自然的勢力に代位して世界を動かすことが出來る。こゝにも世界開化の

進路は邦國開化の進路によつて定められる。要するに歴史生活に於ける人生開化の主流をなすものは邦國開化であり、世界開化は現はれたれども從たる位置に止まる。苟も人生開化を見るには、「世界人類」など言ふ概念に迷ふてはならぬ。彼の個人や社團や階級や社會の開化の如きは悉く皆邦國開化の構成分たるに過ぎない。

邦國開化には各國に共通なる面もあれど、また別殊なるものがある。共通面と別殊面とは始めから一つの具體的なる各國の「自體性」を成して居り、諸邦國開化が源流及び並流の後に觸流し交流し周流し合流するに及んで共通面は普遍面となり別殊面は特殊面と化する。此際に大切なることは、普遍面を過度に重視することなく、普遍面と特殊面とが一つとなり居る所の邦國開化の「自體性」に重點を置く見方を忘れないことである。ましてや他國の開化に迷ひ込んでこれを世界的普遍性と誤認し、却つて自國開化の自體性を一國の特殊性に止まると錯覺するが如きは、謂はゞ他國の開化に接觸したる場合の若氣の過失とは言ひながら、色に迷ふて身を滅ぼすことゝなるのである。諸國の中にても邦國開化に於いて普遍性と特殊性とを具備し、最も明確に自體性を示現して諸國の典範となる國は卽ち日本國である。諸國の中にても曾て興亡の事實なく、最古の國にして且つ國體の不易なる歴史を續けるものは唯だ日本あるのみ。記錄なき時代より今日に到れる國は日本と中華との二つのみであるが、中華國は國體の變遷に過つて國家心意を斷續せしめ邦國開化の跡が錯雜してゐるから、邦國開化の發達を見るに最も適當し且つ唯一と思はれる國は唯だ日本あるのみ。他の國々には開化の或面に於いては日本よりも優れたるものあるも、邦國開化を一體として見ようとする場合には日本國を措いて他にこれに勝る國はない。我國の文化學徒の中には日本國の本領を知らざるを以て恥とせず、或は曾て日本と親しくなつたことを告白せる者も居るが、そもそも彼等は學徒として人生開化なるものを心得てゐるだらうか。人生開化の典型たる日本邦國開化を知らない

でどうして人生問題を口にする資格があるだらうか。

日本の邦國開化の一大特徴は、高天より大地が開らけ始めるとき、その大地世界は卽ち「國」なりと見る所にある。その國の發展に於いて今日我等が口にする邦國又は國家が形成されて來たのである。かくて邦國開化は國の統治と國の經營との二段に現はれ、統治によつて國が全體生活の當體に固成されて前段の開化を現じ、經營によつてその全體生活者が生活の諸方面・諸階層を開展して次第に高い性格に昇る所の後段の開化を現ずる。國が生活主體として生き働き、高い位に上ぼり行く所に人生開化が存する。斯の如く一定の信念と經歷とを一貫して向上し行く最古の國は唯だ日本のみである。國に於いて國の統治の作用が各方面に現はれるものが政治であり、國の經營の作用が各方面に現はれるものが運營である。邦國開化の內容を克く示現するものは經營であり、今問題とする經濟はその一運營に外ならないから、今主として經營に就いて述べることゝする。

國の經營に見られる人生開化は多方面に分たれるが、その中にて眞先に取擧ぐべき重要なるものは「天人的開化」と「地人的開化」とである。天人的開化とは高天より開顯した大地に住む人間が高天の神靈に通ふ最も深奧なる生活層であるが、我國に於いては、各人これを爲さず國家がこれを爲す所に特徴が見られる。それは國の祭祀である。國主は國民を率ゐたまひ國民は國主に隨ひまつりて肇國・建國・護國の神靈を祀り、その祭り事を以て國の重要なる營務となす。國の祭祀は國主を中心とせる國家の心が神靈に通ふ尊い行事であり、これを絕たざることによつて國運が不斷に續き、これを厚くすることによつて國家の性格が向上して神靈性に近づく。國の祭祀が人生開化の第一として建國以來不易に存續するものは唯だ我國のみである。我國のみにあつて他國に無い特別のものは世界的普遍性を持たないから尙ぶに足らないと考へ、我國にて最も尊重さるべきものを輕んずる日本人

も居るが、その人々は、恰も生物の中でも人類のみが特別に直立歩行し他の生物は然うでないから、この特殊性は採るに足らぬとして匍匐して歩むが如く、外來の主體忘却の自然主義又は世界主義の惡知惡覺に迷ひ込んだ人々である。次に高天より開けた大地に生れ來る人間が大地に向つて働きかけるものが「地人的開化」である。この生活には先づ人の身體が生れて大地から養はれ、やがて死して大地に解け行く所の自然の地人關係を始めとし、次いで人間は地物から來る災害を避け防ぐことから地物に依存して裨益を求め享けることに及び、遂に大地と親み大地と共に生きる天然の地人關係に到つて終る。以上の地人生活の中にて人間が一團となり地物に依存して身體機能を保持し擴充する生活面が卽ち經濟生活である。經濟生活は始の自然の地人關係と終の天然の地人關係との間にあつて、地人的開化の中でも最も廣汎なる且つ複雜なる生活內容をなす。斯の如くにして人生開化は天人的開化を頂峯となし地人的開化を基底となし、人は常に「神がかり」であり、兼ねて「土がかり」にてその生を營み、こゝに天地人の三位一系が現示せられる。

天人的開化と地人的開化との間に立ち、直接に天地に向はないで人々の間に成立する開化面を「人間的開化」と呼ぶ。これには一方にあつて內外に亙り武力を以て邦國生活を防衛するものと他方にあつて內外に通じ文才を以て人心の內部に發起する創意を眞正美善の形相に表現するものとがある。軍武力の發動は決して國家目的を遂達する手段ではなく、目的遂達の行程そのものであり、我國の軍武活動は國が障碍抵抗を排除して生育・創造の大業を營む開化の一面である。これを「建武的開化」と呼ぶ。創意の表現は學問・技術・美術・文藝・道德・宗教等多岐に分たれる「人文的開化」であり、「文化」と言ふは卽ちこれである。文化は人生開化の中にてもまことに重要なる位置を占めるが、それにしても邦國開化に列する一つの開化面に止まり、國を離れた文化はない。國を忘れ

た文化至上觀の如きは根は無くとも華が咲くと思へる錯覺に過ぎない。更に建武的開化と人文的開化との間には、同族を增强するものと身體質位を善くするものと性能・精神の成長・向上に力めるものとの三つがある。人は必ず同族生活を營み、同族は人類・人種・結緣・邦國を範圍としてそれ〴〵類族・種族・緣族・邦族の順序を以て發展するが、緣族までは自然的に同族增殖が行はれ、邦族に及んで意識的に同族の質を良くし量を加へる開化面を生ずる。これが邦國開化の一たる「優生的開化」である。この開化と共に人々が未熟なる身體機能を發展向上せしめるものが「强健的開化」であり、人々が未熟なる心的性能を啓發し進展せしめ精神を覺悟し練成するものが「教養的開化」である。

上述の如く人生開化は邦國開化として、先づ國の統治に於いて全體を固成し一つの生活主體を成立せしめる統治的開化行はれ、次いで全體者の生活に於いて國の經營が行はれ、是處に七つの經營的開化が收められる。統治的開化は基礎的開化にして經營的開化は建築的開化とも言ふべく、これらは總べて一體・一系を成して人生開化を遂げしめる。今我等が問題とする「經濟」は邦國開化の一面たる「地人的開化」の重要なるものに屬する。斯の如く人生に於ける經濟の位置を見屆けることによつて經濟の何たるかゞ明かとなる。これは經濟科學に見るやうな經濟の自己限定ではなく、人生世界觀から導かれる所の經濟の「自分立位」の決定である。人生全般に於いて經濟は如何なる分野にその位置を占めるかゞ定められるときに、經濟の哲學的認識に進み入ることが出來るのであり、またそのことが已に經濟の哲學的觀念ともなるのである。

四　見上げる經濟の意義

「經濟」の語が含む觀念は―この語がもと漢語であつても和漢を通じて―、國家が主體となり地物に依存する國民生活面を經へてその美を濟すことにある。言葉の上では唯だ國家が經へ濟すのであるが、この場合の國家の志向は地物に依存する國民の生業にあることが「經濟」の持つ觀念であり、同時にそれが其れ以外に美を濟す所の國の經營面から區別される特徴である。その點は古來からの言葉の約束である。然るに西洋諸國が共通の語原を持つ「エコノミー」は、古代ギリシヤの時から已に國家威力の衰退と社會的生業の進運とによつて人民生業の觀念に傾いてゐた。我國でも江戸期から明治初期までは「經濟」に固有の意義を保有せしめてゐたが、次第に西洋近世の社會經濟に倣ひ社會經濟思想を學ぶに從つて、固有の「經濟」の意味を「エコノミー」の意味に取替へるやうになつた。この事は恰も我が「國體」の語と西洋の「ステートフオーム」とを同架する如く、心外に堪えなかつたが情勢上如何ともなし得なかつた。然るに今や經濟が力强く國家的性格を回復し來たり、自由經濟から統制經濟に移り、統制經濟から統營經濟へ移らうとしてゐるので、「經濟」の語も固有の觀念を回復しつゝある。勿論現代の統制經濟若くは統營經濟は、近世の社會經濟を通じて來たものであるだけに、それまでの國家が行つた經濟とは著しく內容を複雜ならしめてゐるが、それは現代國家が舊時代の國家と異るに相應して複雜なる國民生業を包容せるまでにて、國家が經濟を營むと云ふ點に於いては古今を通じて一貫してゐる。殊に我國にては獨特の國體に伴ふ獨特の國業が行はれ、經濟も亦その國業の中に列する位置が次第に明かになつて來た。「經濟」は當然に「國」の經濟である。世界の經濟は國々の經濟の連結に止まる。個人や家族や企業には「エコノミー」ならばともかく、「經濟」の語は許され難い。我々も以前には經濟の語を濫用したが、今では「エコノミー」又は「ウイルトシヤフト」などを「經濟」と譯するのは妥當でない感を持つ。語感も亦固有のものに復活しつゝある。

邦國開化の中でも基礎的なる統治が國を離れては考へられないことは何人も疑はないが、建築的なる經營とな

れば已に忘國的個人には了解され難い。その中にても極めて大切な天人的開化卽ち國の祭祀は唯物觀を奉ずる個人にとつては全く無緣のものである。更に地人的開化も人文的開化も多く國を忘れた人々によつて取扱はれ、忘國の民の多くは近世の經濟人と文化人とであつた。今や皇國の大事に際して經濟戰力や文化戰力を增强する必要から、それらの忘國人を皇國に歸向せしめる時となつた。「經濟」と言へば直ちに「國の經濟」と感ぜられる時も近づきつゝある。これまでの經濟科學は、經濟とは欲望を遂達する手段の調達なりとか、無限の欲望と有限の手段を以てするその充足との對應關係なりとか、最小の犧牲を以て最大の收穫を求める生活行動なりとか、貨幣によつて表現せられる生活行動なりとか、さま〳〵の概念を與へてゐるが、これらは總て國を忘れたる小人功利の輕侮すべき觀念である。

經濟の近世科學的認識を超えて現代の哲學的認識に入るとき、これまで經濟科學にて主張された偏狹不具なる經濟思想は或は修正せられ或は排棄せられる。

其一には、經濟生活は一層高き生活の爲の手段であると見る西洋の功利主義的思想は一掃されなければならぬ。經濟は邦國開化の系統に於ける地人的開化の要部を占めて他の開化面と並立する。また經濟活動は他の開化面の活動に時間の上にて先立つこと多きも、これは一貫せる目的遂達の先後階段をなすに止まり、後段目的に比べて前段目的となるのみである。經濟活動には幾多の手段を用ゆるとも、經濟生活そのものは他の生活面の手段ではなく、實に邦國開化の各階層に於ける「基底」となる。また經濟活動の中にても生產は決して消費の手段ではなく、生產なければ消費なく、二者は前提後起の關係に立つ。生產を消費の手段と見てこれを輕んずるとき、其處に奴隸・農奴・賃金勞働者の階級を生じ、これらから搾取する不勞消費者階級によつて國を自壞せしめる。日本國が不滅なるは、高き天人的開化と共に之に照應して低き經濟及び生產を手段視せず、大道を踐む地人的開化

として敬重するが故である。生産は凡て勤勞に依るが、特に我國では勤勞本位を正道とする。

其二には、經濟も生産も手段でなく、他の生活面と並立し又は連續する一の目的活動と見るとき、それ自身が趣向・趣旨を懷くことを知り得る。これを知らなかつた西洋の經濟學は彼の剩餘價値を收得する經濟主義から出發する。かゝる小人思想がヨーロッパ沒落の豫言に通ずる。その沒落より脱却しようとするドイツやロシヤの努力には同情すべき點がある。幸に我國には太古以來傳はれる經濟の道が儼として立つてゐる。それは開化一般にあつては「むすび」の道であり、經濟生活に於てはその生活に適應すべき創造主義である。創造活動によつて地人的開化たる經濟が無限に榮え行く。「むすび」の神命を承けて永遠進展の隆榮を擔ふ生産活動にして始めて勞働神聖の讃辭が與へられる。

其三には、經濟を如上の目的活動と見るとき、これまで經濟學の中心問題であつた經濟價値の觀念にも大なる修正が要求せられる。彼の主觀價値及び客觀價値の觀念は孰れも近世社會の横斷面に求められたものであり、そのまゝにては國の經濟には通用しない。その主觀は個人主觀であるから、これを超ゆる國家主觀に上ぼらなければならない。その客觀は個人が社會を見るものであるから、自由流通の行はれる範圍には不定の誤差を以て妥當するが、國の經濟に於いて價値を判定するには役立たない。價値は常に主觀的判斷に於いて成立し、國の經濟にあつては國家主觀に依る。是處に到つては經濟價値は是までのやうな社會經濟人を引寄せる魔術の笛音ではなくなり、國民の營みを導く一つの指標となるのである。

其四には、經濟價値を指標として對物創造活動を統一的に行ふものは國家であるが、國家が如何に統一的運營を行ふかゞ現代經濟の重要なる課題となる。この點に就ては近世の經濟科學は殆ど何の貢獻をも爲し得ない。我が邦國經濟は是處に我が國體に卽する世界無比の分業と續業とを打建て得る。經濟事業を實營する大方針は國業

精神から來るが、これらを包む經濟組織の確立は國體から授けられる。

其五には、從來の經濟科學が夢想だにもしなかつた高度の問題に入る。先述の如く人間の大地に面する交渉は、始に大地に育てられ大地に解體する所から出發し、次に消極的に地物からの被害を防ぐことから積極的に地物から受益する經濟活動に進み、終に大地と親み大地と共に生きる所に到達する。我等にとつて深遠なる問題は、如何にして經濟生活の必要面を存しながら大地と親しみ大地と共に生き得るかにある。經濟に頓着しない詩人は大地と親しむ調を謳ふが、それでは人生開化に於ける基底が壞れる。こゝに深刻なる哲學的認識が要請せられる。

西洋近世の經濟科學は極めて豐富な積蓄を持つて一時代の一局面を說明し得たが、これを現代の進運に擬するときには大なる誤謬に陷り重き罪過を犯すのである。かくて新しい經濟科學を打建てることは今日の急務であるが、更にそれにはその科學を導く哲學的認識を缺ぐことは出來ない。幸にも我國には優れた固有の哲學的源流が存し、哲學を導く尊い「御言」が傳へられてゐる。近世の經濟科學は人文科學でありながら自然科學に倣つたものであるから、遂に法則探究の境を越へ得ない宿命を持つ。されど自然科學とても法則探究に止まる限りは最後の難關を通過し得ない。自然科學が第一の前提としてゐる「齊一の公理」でさへも何故に齊一なるかを尋ねるときは、それは唯一の「命令」が發動するからと答へる外はあるまい。自然科學でさへも「命」の前に謙虛なるを要する。まして人生と「命」に生くべき人生を研究する人文科學、その一たる經濟科學が傲然として法則至上を唱へてゐる限りは、それは一の學徒的娛樂とはなつても人生を導く學問とはなれぬ。人は「命」を知り「命」に隨つてのみ善く生き得る。經濟生活の「命」を知ることは科學的研究にとつても大切であるが、分派の學たる科學では暗中模索に終る。その「命」を知らうとするには、必ずや借物でなく我と我身に適合せる國學的精神に依ることを肝要とする。

經濟の哲學的認識は其處から汲みとられる。